

## プーシキンの外国語とナボコフの奇妙な関係

中田 晶子

ナボコフの注釈を讀んでいて気になることのひとつが、プーシキンの外国語に対する低い評価である。英語に関しては「1820年代初頭から1836年までプーシキンは断続的に英語を独習したが、最後まで初心者の域を超えることはなかった」とし、それを裏づける例をプーシキンのノートから引いている。エドモンド・ウィルソンは、ナボコフへの批判の中でプーシキンの英語能力に対する過小評価を指摘し、「ナボコフ氏はプーシキンの語学力が相当なものであったことを認めたくないように見える」と述べている。<sup>1</sup> ナボコフが知っていたにもかかわらず言及しなかったとしてウィルソンがあげる、プーシキンの英語能力を証明する例を見ると確かにそのように思える。ウィルソンの批判に対してナボコフは「自分のあげた例を見ていればわかるはずだ」と述べるのみで、新しい事実を提示してはいない。<sup>2</sup> ブライアン・ボイドの伝記によると、ナボコフは初めプーシキンがフランス語以外に英語、ドイツ語、イタリア語に堪能であったとしていたのに、最終稿ではその部分を変えてしまったという。またナボコフの記述自体にも矛盾があり、プーシキンの英語能力を実際よりも低く読者に印象づけようとした疑いがあるとしている。<sup>3</sup> ナボコフはプーシキンに英語でバイロンを読ませたがらず、ピシヨーの翻訳を通して感銘を受けたことにしたいらしい。しかもその翻訳に対するナボコフの評価が高くはないにもかかわらず、そうなのである。<sup>4</sup>

同様にプーシキンのフランス語能力の判定も非常に厳しい。「ロシア人のほとんどがそうであったように、外国語に秀でてはいなかった。子供時代に習ったフランス語は流暢だったが、個性ある表現には至らず、手紙から判断すると、生涯18世紀の決まり文句を見事に使いこなしていただだけである」。ウィルソンはこの評価についても疑問を呈しているのだが、ナボコフは「言語能力に関するウィルソン氏の意見と自分の意見はまったく異なっている」と述べるにとどまっている。<sup>5</sup> 注釈全体を通してナボコフはプーシキンのガリシズムを頻繁に指摘する。ガリシズムと定義することが疑問に思われるような一般的な表現をあげることも多い。強引とも見えるそれらの指摘は、プーシキン文学におけるフランス

語の重要性を示していると言えるかもしれない。しかしそれはあくまでもプーシキンのロシア語の中に溶け込んだフランス語の指摘であり、フランス語使用者としてのプーシキンの評価となると、一転して非常に厳しいものとなる。

ナボコフとプーシキンのフランス語のレベルはどちらが高かったのか、という素朴な疑問がわく。確かにナボコフは7歳の時からスイス人のガヴァネス(マドモワゼルOのモデルとなった Cécile Miauton)からフランス語を習い、家族とも時にはフランス語で話し、ケンブリッジ大学ではフランス文学をも専攻し、パリではフランス語で短編とエッセイを出版しており、状況によってはフランス語作家となった可能性もあった。しかしナボコフの育った時代のロシアでは、すでに貴族達もロシア語で話し、学習していた。多言語使用者ではあっても、ナボコフの母語はあくまでもロシア語である。<sup>6</sup>一方、プーシキンが育ったのはフランス語支配の時代であり、貴族階級の日常会話、学習、読書の多くがフランス語でなされていた。プーシキンにとってのフランス語は(「母国語」とは呼べないにしても)実質的な第一言語に近い。プーシキンとナボコフの中間世代に属するツルゲーネフやドストエフスキの小説には、西欧式の教養は充分でありながら、ロシア語では手紙ひとつ満足に書けない貴族の男女が登場する。ナボコフの自伝には、幼い息子達が英語の読み書きはできるのにロシア語ではできないことに気づいた父親が愕然としてロシア人家庭教師をつけるくだりがある。ごくわずかな例にすぎないが、こうしたところにもロシアの貴族社会におけるロシア語の趨勢を見ることができるのではないか。もっとも、外国語の学習者にさえその言語のネイティブスピーカーが書いた文章の巧拙を判断することができるのだから、ナボコフがプーシキンのフランス語に批判的であっても何ら不思議はない。それにしてもナボコフの評価にはやはり何らかの意図が隠されているように思われる。

リツェイ時代のプーシキンがフランス文学に熱中し、「フランス人」と綽名されていたことはよく知られている。これについてもナボコフは第8章の注で異論を述べている。その綽名は一般に言われているようにフランス文学への傾倒に由来するよりも、むしろ当時フランスを表現するメタファーとして使われていた「猿と虎」にちなんで、茶目っ気と反抗心を兼ね備えたプーシキンにつけられたものだというのである。「フラ

ンスは「猿が虎を苛だたせる国」の表現が『カンディード』やヴォルテールの私信にあることを例にあげ、リツエイ同窓会時にサインに添えてプーシキン自身が「フランス人」と「猿と虎の混血」の書き込みをしていることを証拠としている。確かに興味深い事実ではあるが、ナボコフの説明には、プーシキンとフランス語、フランス文学との距離を広げようとする意図が露骨に感じられ、プーシキンを西欧文学の伝統の中に位置づけようとするナボコフの姿勢を考える時、その意図は謎めいて見える。西欧文学の伝統のもとにありながら、プーシキンはあくまでも「ロシア語の詩人」であり、フランス語は彼自身の文学の言語ではなかったと主張したいのであろうか。

ユーリー・ロートマンによれば、プーシキンの時代、ロシア貴族の私的な手紙はフランス語で書かれており、文学者のものに限らず、フランス文学からの引用が多く含まれていたという。<sup>7</sup> 日本の本歌取りを思い起こさせる習慣であり、貴族社会における洗練のひとつの形と見える。しかし見方を変えれば、フランス語が先祖伝来の言葉でないことに由来する、言葉の層の薄さを表しているように見えないこともない。実質的な第一言語ではあっても、「国語」としての一種の限界がロシア貴族のフランス語にあったのではないか。貴族社会の洗練が自国文化を否定した上でフランスに求められたことは、オネーギンの人物造型が西欧文学に原型を持つことと同じ根を持つと言えるだろう。

第1章に現れる「憂愁の主題」についてナボコフは6ページを費やし、オネーギンの原型を西欧社会に広く見られた社会現象と文学における流行に求め、「オネーギンの憂愁」を「オネーギン主義」と名づけてアレクサンドル1世時代特有の社会・歴史的現象として延々と論じてきたロシア・ソ連の批評家たちの熱狂に水をさす。オネーギンの精神状態が広く西欧に及んでいたことを示すため、spleen や ennui の初出、定義から様々な用例までをヴォルテール、ボズウェルやラ・フォンテーヌ、またロマン主義の作品群から綿密にたどってみせる。さらに18世紀の社会現象ともなった気鬱症のイギリス旅行者の自殺の流行をも紹介し、19世紀初期の英仏小説における ennui 症状の進行と対処法を分類する。こうしてオネーギンの人物造形は、バイロンのチャイルド・ハロルドを越えて西欧ロマン主義の系譜に直接に連なるものとして位置づけられる。ただしオネーギンの人物の原型は西欧文学にあっても、プーシキンは紋切

り型となった原型から、独自の存在感を持つ、生きいきとしたオネーギン像を作り上げた。ナボコフはそこにプーシキンの天才を見ている。文学と人生の両方から独自の人物を創造し得るプーシキンにしてオネーギンを誕生させることができたのだという。そうだとすれば、プーシキンに高い外国語能力を認めたとこで何の問題もないのではあるまいか。

先述のように、ナボコフの注釈では文学史上の定型に対する批判が繰り返される。ロマン派の定番の情景である「ブレンタ川のゴンドラと船頭の歌うタツソの 8 行詩」が、「湖上のボート」からいかにして大仰な定番の場面設定となつて行ったかをたどり、プーシキンがそのようなクリシェをロシア語で表現することに才能を傾けたことを嘆く。このような現実無視のクリシェ形成とは対照的に、ナボコフは厳密な実証主義によって読者を魅きつける。1818年にフランスから輸入されたシャンパンの本数とそれが6年間で倍増したことが報告され、プーシキンの図書室の資料から、オネーギンと語り手プーシキンがネヴァ河畔を歩いた1820年5月の夜の気温や明るさが推測される。しかしプーシキンの外国語能力に関するナボコフの評価には、読者を無条件に納得させると共に魅了する、こうした実証主義は見られない。おそらくプーシキンは英語で自由にバイロンを読むだけのレベルには達していなかったのだろうし、英語の発音や音韻についての知識も怪しかったかもしれない。しかしある程度の英語能力はあったはずであり、部分的にせよ、バイロンを味読することも可能だったのではないか。プーシキンが直接英語でバイロンを読んだのではなく、ピシヨー経由で間接的にバイロンを読むことにナボコフが固執する理由は何なのだろうか。

ひとつの可能性として考えられるのは、そのような距離と間接性こそが、ナボコフにとって、プーシキンと自分を一世紀を隔てて結びつける重要な要素のひとつであったのではないかということである。国外に出ることを切望しながら生涯一度もロシアの地を離れることがかなわなかったプーシキンと、子供時代から日常的に西欧への旅行を体験し、長じては祖国喪失者となつて欧米の地で暮したナボコフは、まったく異なる体験をしたように見える。しかしナボコフの作品の中で、生まれ育った場所や亡命後に暮した土地は、それぞれナボコフ的な「発明」を経て現れるのであり、ありのままに描かれることは決してない。主人公は常に重大な喪失を体験しており、喪失の対象への越えることのできない隔た

りを絶望的な努力で様々に埋めようとする。しかも多くの場合、ナボコフ作品の根幹をなすその行為はきわめて複雑な手続きを伴ってなされている。ナボコフはプーシキンの中に同質のものを探し、提示しようとしているのではないか。ピシヨーの自由奔放な翻訳（文字どおりの「翻」訳）を通してバイロンの真髓を聞き取ったことにナボコフはプーシキンの天才を認めるのだが、私達はそこに、プーシキンと彼が求めた外国の文学や文化との間の距離と密着の交錯した関係を感じる。プーシキンがフランス語訳を所有していたディズレイリの『文学の骨董』から「ゴンドラの船頭の歌は、近くで聞くと荒々しいが、はるか彼方から聞こえてくるとなんととも言えない魅力がある」という部分をナボコフは引用し、プーシキンはピシヨーのゴンドラからバイロンの船頭の歌を聞くことによって同様の距離感覚による魅惑を感じたと書き加えている。このプーシキンは、シャトーブリアンがアメリカを見ずに『ルネ』と『アタラ』に描いた風景をアメリカの地方に見たハンバートそのものではないか。第8章にビュルガーの『レノーレ』、『ロリータ』にも引用される

が登場する理由についての幾重にも入り組んだナボコフ的解釈「実際には体験しなかった記憶の旅路をたどる途上でプーシキンが目撃したデカブリストの処刑場面がそこに隠されているのではないか」にも同質のものが感じられる。プーシキンを語るナボコフは、こうしてひそかに自己と自作への道標を読者に示している。

---

<sup>1</sup> Edmund Wilson, "The Strange Case of Pushkin and Nabokov," *A Window on Russia: for the Use of Foreign Readers* (New York: Farrar, 1972), 225.

<sup>2</sup> Vladimir Nabokov, *Strong Opinions* (New York: Vintage, 1990), 265.

<sup>3</sup> Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: The American Years* (Princeton: Princeton UP, 1991), 350-52.

<sup>4</sup> プーシキンの英語能力に関する先行研究についてもナボコフはなぜか触れていない。第1章の注釈36を参照。

<sup>5</sup> *Strong Opinions*, 265.

<sup>6</sup> フランス語版の「マドモワゼルO」には、ナボコフの子供時代に話されていたフランス語についての記述がある（この部分は英語版には含まれていない）。それによると、当時のロシアにはフランス語の伝統が根強く残っており、ナボコフの周囲ではごく普通に話されていたが、それはロシア語の構文や単語が混じった一種独特なフランス語だったという。V. Nabokoff-Sirine, "Mademoiselle O," *Mesures* 2, no. 2 (April 1936), 166. プーシキンのロシア語に見られるガリシズムを執拗に指摘するナボコフが、スラヴィズムのフランス語に囲まれていたというのは面白い。

<sup>7</sup> ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン、『ロシア貴族』桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳（東京：筑摩書房、1997）、91-94頁。